



上田耕沖《牧童図》(部分)
江戸後期-明治時代

クラーク財団日本美術コレクション

アメリカから来た日本

日本美術に魅せられたアメリカ人 ■ クラーク財団日本美術コレクション



上田耕沖《牧童図》
江戸後期 明治時代

新年明けましておめでとうございます。
本年もまたよろしく願い申し上げます。

時の流れは人にとって決して単調なものではありません。楽しい時はあっという間に過ぎ去ってしまいますし、いやな時間はなかなか終わろうとしてくれません。気の持ちよう次第で早くも遅くもなり、改まったりくだけたりと、中身の濃淡や味わいが変わってきます。とりわけ年の初めの新鮮で晴れがましい気分は、格別のものがあります。月並ではありますが今年こそは、皆様に親しまれる美術館としての内実をいっそう高めるべく、努力したいと意を新たにしているところです、

さて、新年早々の企画として、米国カリフォルニア州にあるクラーク財団から百点近い日本美術作品(絵画が主でわずかですが5点の仏教彫刻が含まれます)をお借りした特別展、「アメリカから来た日本」が開催されています。

財団の設立者でありウィラード・クラーク氏は、酪農に関わるビジネスで財をなした実業家です。アメリカ19世紀絵画やインド・東南アジアの古代仏教彫刻にもすぐれたコレクションを形成されてきましたが、近年は日本美術に集中し、尊敬する日本美術史家シャーマン・リー博士夫妻の名前を付けた日本美術研究所をハンフォードという町に設立されました。そして自宅の敷地内に美術館を建設し、年間を通じて公開展示や美術講座等の活動を精力的に展開されています。

今から11、2年前にお会いして以来親しくご交誼をいただいた関係から、クラーク氏にお願いしてそのコレクションの里帰り展をもくろんだ第一の理由は、それが一人の健全なアメリカ市民によって、自らの楽しみのために集められた、きわめて個人的な趣味の色濃いコレクションだったからです。

失礼ながらクラークさんは、アメリカにいくらもいる巨万の富に恵まれた、先祖代々の大富豪などではありません。自分の才覚と努力とによって得た収入の一部を、好きでたまらない日本の美術を買うために、妻や子どもたちの了承の下に費してきたものでした。いわば、自分のお小遣い(もっとも私のその何十倍、何百倍ではあります)による、身銭を使っただけのコレクションなのです。

もちろん、日本の国内にも、骨董品や美術品の収集に精を出している方は沢山います。そうした方々により以上頑張っていたただくためにも、異国の地にあり、まるで異なった文化風土を背景にしたアメリカ人、冗談で言うのですが西部の「カウ・ボーイ」が集めたコレクションを、まとめて一括お見せしたかったのです。それは、クラークさんが日常の生活の中で、命の糧のように愛している絵画であり、彫刻作品であって、いずれ値が上がるだろうとか、子や孫のために遺産に残そうなどというケチな考えは、はなっから浮かびもしなかった純粋な愛玩物だったのです。

クラークさんの何よりも楽しい時間は、一日の仕事を終えて自宅に帰り、ピッチャー一杯の マティーニと少しのつまみをもって美術館の展示室に籠る時だそうです。CDプレーヤーでバッハの音楽を流し、好きな日本の絵画に見入っているつかの間は、何にも代えがたい至福の休息となっているようなのです。

会場に並べられた作品をご覧になればすぐにお分りになると思いますが、クラーク・コレクションの特徴は、シリーズ(まじめさ)とユーモラス(おかしさ)の両極を大胆に往き来するところにあります。仏教や神道など日本人の信仰に関わる絵画や彫刻、あるいは繊細で時には深刻な感性を潜ませる水墨画や文人画に心を引かれるかと思えば、「彦根屏風」のパロディを試みた柴田是真の金屏風や、鳥や虫、動物を活躍させる様々な戯画、鬼や幽霊の絵などにまで、心軽やかに遊んでおられるのです。

美術を貴いものと仰ぎ見るばかりでなく、慰安を与えてくれる身近に親しいものとして愛好する、そうした初心を思い起させてくれるのが、クラーク・コレクションの良さでしょう。新しい年のひとときを充実させるためにも、美術館にお出かけになりませんか。もっとも マティーニやバッハのおもてなしは残念ながらできませんが...

館長 小林 忠

アメリカン・コレクションの魅力



柴田是真《室内遊楽図屏風》明治時代

「よく知られた作品」であるかどうかなど、すでに示された視点によって収集を決めることが多い。しかし彼らは研究者でさえ知らないような

ジャポニズムの熱狂が高まった19世紀後半より、日本美術を集める欧米のコレクターは飛躍的に増える。日本には美術という言葉さえ新しい響きであった頃、ましてや浮世絵などはまだ生活の楽しみを離れるものではなかった頃、欧米人の新鮮な驚きと好奇心が浮世絵を立派な美術品にして、美術市場を賑わせはじめたのである。

20世紀に入って日本人が本格的に浮世絵の美しさを認識し始めた頃には、浮世絵の評価の基盤は欧米人によって確立されていた。価格もまたそれに準じていたわけで、外国人の眼からも評判の高かった浮世絵師の作品は、すでに庶民がおいそれと集められるものではなくなってしまったのである。特に北斎や広重はジャポニズムの動きの中で作品が活発に取り引きされていた浮世絵師であり、また今では取り引きされれば数千万円というのが普通という写楽などは、その個性的な表現が外国人を夢中にさせたことで評価の高まった代表例である。

さて同様に欧米のコレクターが日本美術の価値観を先導するというのが近年でも起こっている。すでに評価の定まった浮世絵版画ではなく、江戸時代の絵画作品を中心に、重要なコレクションが次々と誕生しているのである。特にアメリカのコレクターたちは活発で、その先駆けとしてニューヨークのパーク・コレクション、続いてロサンゼルス・コレクション、ニューオーリンズのギター・コレクション、メリランドのファインバーグ・コレクション、そしてこのクラーク・コレクションといった新しい世代のコレクターが今も活発に日本の美術を収集している。

決して日本美術を専門に学んだというわけではない彼らに共通するのは、自分の眼で面白いと感じたものに対して実に素直に反応するという、その収集の姿勢である。日本では、美術館にしても個人にしても、すでに確立された客観的な価値観をもとに収集するのが常である。「有名な作家」であるかどうか、

作者の作品を、面白いと思えばそれだけで買う。そして実際にうれしそうなのである。

そのうれしそうな様子は、よきライバル関係にあるように見える他のコレクターたちに伝えられる。そして彼らもまたその作品を面白がれば、同じ作家のものが求められ、広まっていく。伊藤若冲、曾我蕭白、長澤蘆雪、酒井抱一、鈴木其一、中村芳中、柴田是真、神坂雪佳など、クラーク・コレクションにも含まれる江戸・明治時代の個性ある作家たちの何人かは、日本の美術館がやっと近年求めだしたものだ。残念ながら日本での評価はすっかりこれらアメリカン・コレクターたちに先回りされる形となった。

若冲などは代表格で、2000年に京都国立博物館で特別展「伊藤若冲」が開催されたが、もしブライス・コレクションのジョー・ブライス氏がその魅力にとりつかれなかったら、いまだ「知る人ぞ知る」という画家であったかもしれない。しかし展覧会では、多くの人々が若冲の芸術に真に心動かされたというのはまぎれもない事実である。その機会を与えてくれたのも、ブライス氏の功績というよりほかはない。若冲の掛軸は30数年前には数十万円～300万円位が目安であったものが、希少性もあり、今や着色の大作であれば簡単に億の単位に行き着くと言われている。どんなに美術館がほしいと思っても、なかなか許されない作家の一人となってしまった。

もちろん当館のような近年収集を始めてきた美術館にとっても、このようなアメリカン・コレクターはライバルといえる。どのコレクションにしても、近年のオークションなどで目の前を通った作品が多く含まれている。しかしコレクションの醍醐味を存分に味わいながら、時に冒険的とも思えるような活発な収集を続けられる彼らの前には、美術館とはひ弱な存在であるに違いない。公立美術館では、内容的にも價格的にも評価の客観的な裏付けのない収集はできないし、もちろん一個人の意見



秋月等観《花鳥図屏風》室町時代

であってもいけない。結果として「質はいいが無名である作家」の作品は収集しにくいことになる。「駄作であるが有名な作家」の作品よりはるかに安いとしても、である。でもこれを続けられれば、また彼らのような素直な眼に先を越される可能性は多いに残されるだろう。今のところ、自分の眼だけを基準に、自在に美術品を集める喜びを堪能する彼らは、やはり選ばれた存在のように見える。

美術館の作品収集に携わる学芸員として、「ああこの作品はまたビル・クラークさんが買ったのか」という半ば残念でありながら、少しほっとする感覚を何度か味わった。千葉市美術館のコレクションにする可能性は失われた、でもほっとするというのは、クラーク氏をはじめ上記のコレクターたちが、優れた美術品を個人だけのものとして、他人の眼には触れ難くしてしまうような類の方達ではないということである。それどころかクラーク氏のように、公の美術品としての取り扱いを積極的に進めようという立場をとられる方が多くおられる。

クラーク氏は、日本美術を常設する美術館をオープンさせたばかりでなく、研究者や学生たちが直接作品に接して研究が行えるようにという、日本の美術館でも二の足を踏んでいる研修制度を設け、研究機関として財団を整えたのである。その意味でクラーク氏は現在最も尊敬されるべきコレクターの一人であるだろう。アメリカ人が異国の美をこれほどまでに評価してくれるということ、そしてこのようなコレクションがまとめて里帰りし、我々日本人が展覧会として鑑賞できるということは、やはり一つの幸運であろう。

このような個人コレクションの展覧会では、コレクターの視点を感じることが鑑賞の楽しさを導き出してくれるような気がする。8年ほど前、クラーク氏のご自宅で作品を拝見させていただいた時、氏がいかにも楽しそうに「私はユーモラスな絵が大好きなんだ」とおっしゃられたその時の表情をととても印象深く憶えている。美術史における位置付け、一般的な評価などの頭でっかちな価値観ではなく、楽しく鑑賞できればよいではないかという立場は、うらやましいと同時に自らを省みる気持ちを起こさせた。自分は美術に対する感動に今どれだけ素直に従えるであろうか。この展覧会は、そのような基本的な作品鑑賞の姿勢を、おそらく多くの人々に呼び覚ますこととなる。そして実直で温厚、ユーモアにあふれるクラーク氏の人柄を身近に感じながら、これまでの日本美術のイメージをはるかに拡大する多様性と特質に気付くはずである。

学芸員 田辺昌子



クラーク財団日本美術コレクション アメリカから来た日本

2003(平成15)年1月4日(土) - 2月2日(日)
10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

但し1月13日(月・祝)は閉館 翌14日(火)は閉館

【入館料】 一般800(640)円

大学・高校生560(450)円

中・小学生 240 (200)円

()内は前売・団体30人以上の料金

前売券はJR東日本びゅうプラザで発売

【主催】 千葉市美術館 / クラーク財団 / 日本経済新聞社

協賛 松下電器、日本興亜損保

協力 日本航空

監修 学習院大学教授 千葉市美術館 館長 小林 忠

米国アーモスト大学教授・クラーク財団理事会会長

サミュエル・C・モース

関連イベント

講演会 2003年1月26日(日) 午後2時より

講師：サントリー美術館 主席学芸員 石田佳也

演題：「クラーク・コレクションの魅力」

会場：千葉市美術館講堂(11階) *入場無料 / 先着順150名様

ギャラリートーク

毎週木曜日 午後2時より 担当学芸員

*参加自由 / 千葉市美術館 8階展示室入口にお集りください。

千葉市美術館所蔵作品展 旅ゆけば・・・



坂本繁二郎『日本風景版画第六集 筑紫之部』五「火の海」



前川千帆『紀行スケッチ帖』

千葉市美術館のコレクションを全館展示で紹介する、冬期恒例の所蔵作品展を開催します。

今回は、「旅」というキーワードで、江戸時代の絵画・版画、近代の版画、房総ゆかりの作品、現代美術というコレクションの各分野から、新収蔵・未公開作品を中心に、約200点を一堂に展示いたします。

江戸の昔の旅人のすがた、旅へのさそいやあこがれのつまった作品、新しい旅先を発見するよろこびなど、そして、ものや人が旅して動くと言うことの意味に至るまで、「旅」にまつわるイメージのさまざまをお楽しみ下さい。(ma)

主な出品作品

狩野山雪《雪中騎驢図》
伊藤若冲《乗輿舟》
坂本繁二郎ほか《日本風景版画》
Thomas Struth《Strasse》

千葉市美術館所蔵作品展

旅ゆけば・・・

2003(平成15)年2月11日(火) - 3月2日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般200(160)円

大学・高校生150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金

「20世紀版画の巨匠 浜口陽三展」 小さな詩人たちとにわか職人たちの話

ふねが
もうすぐ
うごきそうだ...

展覧会の会期中にはさまざまなことが起こるものですが（あるいは美術館が「起こす」場合もあります）昨年の11月から12月にかけて開催された「浜口陽三展」でもいくつかの忘れがたい出来事がありました。そのなかからふたつをご報告しましょう。

ひとつめは、千葉市立都立小学校の5年生による展覧会見学です。3クラスの計85人が来てくれました。作家や作品に関する情報を一方的に伝えるのではなく、あくまでも曇りのない目で見て何かを感じてもらおうと、担任の先生や当館のスタッフが「何が見える？ 何が聞こえる？」と問いかけ、子供たちがそれに答えるという対話形式で見学は始まりました。そして子供たちは作品とゆっくり向きあい、自分なりの言葉が浮かんで来るのを待ち、ぼつぼつとノートに記してゆきました。学校に戻り、好きな作品を1点選んで詩にまとめたクラスもありました。5年1組の生徒の詩のなかから、港（1951年）に寄せたものをご紹介します。

ふねがもうすぐうごきそうだ。
ふねではたらく人が
「いかりをあげるぞー。」
ふねが
いかりが
ガラガラガラ
アマゾンに出発だ。

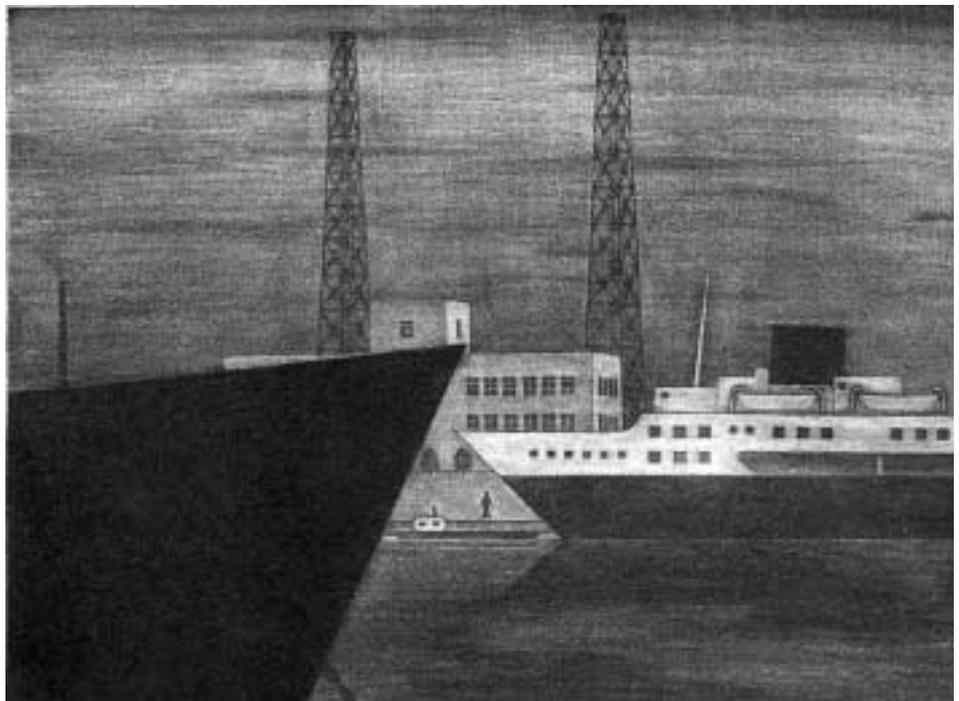
この作者は小さなモノクロームの画面から、はるか遠くアマゾンにまで想いを飛ばしてくれました。

ふだんは残念ながら、展示室で子供の姿を見かけることはあまり多くありません。ですから列ぶ額を見上げて子供がひしめくさまはもの珍しく、また柔らかい頭とまっすぐな目が、作品を前にしてくるくる回転するのを見るのは楽しいものでした。新鮮な、時に奇想天外な視

点には、我々も大いに刺激を受けたのです。

ふたつめはメゾチントのワークショップです。「体験・メゾチントに挑戦してみよう！」と題し、浜口陽三が手がけたと同じ技法にふれるというもので、当館では初の実技講座となりました。参加者は絵に親しむのはじめてという方から作家活動をしている方までさまざまでしたが、講師の生田宏司先生のソフドで明快な語り口と鮮やかな実演に助けられ、レベルの高い作品が次々に生まれました。参加者たちの集中力はこちらが圧倒されるほどで、黙々と版を刻み、刷りの具合を確かめる様子はちょっとした職人集団のようでした。そして受講後は、メゾ

浜口陽三《港》1951年



チントという（ほとんどの方にとっては）未知の世界にふれ、ひとつの作品を仕上げた喜びとともに、浜口陽三のイメージが変わったとの声もちらほら聞かれました。アートは、技法を知ってはじめて気付く点も多いもの。作家の手わざを追体験する



ワークショップより 中央が講師 生田宏司氏



ことが、その栄光や苦悩をより鮮明に浮かび上がらせることもあるのです。

以上のふたつのイベントに共通するのは、参加型・体験型であるということです。昨今美術館はこうした企画を求められる機会が多くなり、我々もあれやこれやと試行錯誤しているところなのです。ただしここで重要なのは、参加・体験それ自体ではなく、いかに参加・体験するかということでしょう。実際に手や体を動かさずとも、いきいきとした経験はできるはずですから。美術館は、その活動の核である展覧会を軸に、来館者が心のアンテナを研ぎ澄ますことのできるような、あるいは作家の手の感触をありありとたどることのできるような、頭と五感を心地よく刺激する場でありたいとつねに考えています。(ni)



都小学校の5年生たちがあふれる展示室

展示室で考える

展覧会が出来あがるまで 3 美術館の個性

千葉市美術館の場合、企画展は年に6回ほど開催しますが、そのうち2本か3本は企画に關与した自主的な展覧会です。他に、企画の段取りまでは關与しない巡回展も毎年2つほど開催するでしょうか。また「市民美術展(通称市展)」も開催します。

自主企画でどんな展覧会を開催するかは、その美術館の性格を決定する重要な問題です。通常その「性格」は収蔵作品の傾向と何らかのかたちで關連付き、コレクションとの相乗効果をもたらす方向で考えられます。例えば東洋の古美術の名品を多く持っている美術館が、欧州の近代美術の展覧会に力を注ぐことは得策ではありません。折角の館の個性を曖昧なものにしてしまうからです。しかし実際は興行的な成功を優先し、知名度の高い印象派、後期印象派やエコール・ド・パリの巡回展を「よぶ」ケースも珍しくないようです。10年程前、日本国内を二種類の大規模な「シャガール展」が巡回、近年もまた二種の異なった「モネ展」が同時開催されているという珍妙な状況がありました。80年代の美術館建築ラッシュの時代、似通った作品を収集する公立美術館が短期間に林立し、結果として近代洋画の価格高騰の一因をなして世界中から侮蔑と嘲笑の眼をむけられたことを思い出します。文化行政はその経験から学ぶものがあつたはずで

千葉市美術館の場合、コレクションは「1.千葉市を中心とした房総ゆかりの美術」「2.近世から近代の日本美術」「3.現代美術」という方針を持っています。よって企画展も、自ずからこの方針に即して、この1~3に關連した内容をバランスよく企画するのが理想的です。今年度の例で言うと、房総関係の展覧会が1本、近世日本美術関係が2本、現代が1本、それ以外が2という内訳でした。なかでは、得意とする浮世絵や現代美術の展覧会では遠方からも愛好家が来訪し、「不便な場所だけど、首都圏では最も魅力的な企画力を持つ美術館」という評判を得るようになりました。

他の分野の展覧会を見たいなら、同じ市内の県立美術館では浅井忠と近代洋画、そして關係するフランス美術を頻りに紹介しますし、近隣の川村記念美術館では、やはり印象派からエコール・ド・パリを毎年紹介しています。1時間も移動すれば、もっと多くの美術館の、様々な展覧会を訪れることが出来ます。どの美術館も、余所からの来訪者を差別していません。文化を自治体単位で考えるのは滑稽なことです。当館の場合、まだまだ歴史の浅い施設ですが、成功している先行館の真似をするのではなく、自前の「持ち味」を創りあげる方向性が、長期的な評価を得ることになることでしょう。(ha)

「美術館ニュース」編集担当から

千葉市美術館のニュース「C'n」25号をお送りします。前号に皆様からのご意見をお願いしたところ、多数のお便りを頂きました。深く感謝申し上げます。その内容ですが、総じて、いたずらに編集方針を変えことなく、引き続き当館での企画展に關連した記事を充実して欲しい、というものが殆ど総てをしめました。皆様のご意見を汲み、紙面の充実に努めて参ります。これからも引き続き、読者の皆様からも内容に関するご意見をご感想頂戴できれば、幸甚に存じます。

次号(4月発行予定)では新年度の展覧会の予定をお知らせ致します。

260-8733 千葉市美術館 美術館ニュース係
FAX: 043-221-2316
e-mail: museum@city.chiba.jp

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：http://www.city.chiba.jp/art

JR千葉駅東口より

徒歩約15分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2003年1月15日

【制作・印刷】株式会社プリンテックメディア